

はじめに

浜田明範
西真如
近藤祉秋
吉田真理子

二〇二〇年は日本のあちらこちらが新型コロナウイルス感染症に翻弄された年であった。新しいウイルスがもたらす未知の病気が持ち込まれ、それが徐々に広まっていった初春。手探りのなか感染拡大に対抗するための方法が考案され、緊急事態宣言の発令を経て、生活が変化していった春。第二波の到来とそれを抑え込んでいった夏。感染の再拡大の兆しが見え始めた秋と強力な第三波に見舞われている冬。

影響を受けたのは日本だけではない。事態の推移はそれぞれに異なるものの、新型コロナウイルス感染症は世界中に広まっている。この感染症がパンデミックと呼ばれる所以である。世界各地の人びとが経験しているパンデミックとともにある生について、人類学はどんなことを考えることができるだろうか。そして、人類学者の声に耳を傾けることにはどのような意味があるだろうか。

人類学は危機的な状況に対応するのがそれほど得意ではないと言われることがある。長期の現地調査に基づいて思考をつむぐ人類学は、成果を出すまでに時間がかかる分野だと考えられている。他方で、世界

各地で起きた感染症のアウトブレイクに際し、人類学者が一定の貢献をしてきたという実績もある。そのような貢献のなかには、感染症を収束させるための実務的なものもあれば、現場で起きていることに独自の視点から光を当てる記述的なものもある。

本書には、人類学と隣接分野からの二六名の研究者の手による一六の論稿が収められている。その多くは、すぐ役に立つ処方箋を提示するものではないが、状況を深く理解する助けになる貢献を意図している。これらの論稿には多かれ少なかれ、まだ生煮えの、つまり思考の途上を捉えた部分が含まれている。決版本とは言い難いところもある。それでもなお、人類学者が集まってこうしてひとつの本を編むことには、いくつかの意義があると私たちは考えている。

パンデミック性

第一の意義は、「パンデミック性」に関わるものである。私たちは、新型コロナウイルス感染症の流行する以前より、多くの病気が存在する世界で生きてきた。そして、ときにその病気とともにあることによって、独特の経験をしてきた。人類学者もまた、そのような経験についてたくさん話を聞き、自ら体験し、そして記述してきた。しかし、二〇二〇年の新型コロナウイルス感染症の流行は、これまでに人類学者が記述してきた病気とは明らかに異なるいくつかの特徴を備えている。そのような特徴の多くは、新型コロナウイルス感染症がパンデミックであることに由来する。そのような、パンデミックであるが故の特徴のことを、ここでは「パンデミック性」と呼んでおこう。

周知のとおり、パンデミックの経験は、持続的な地域的流行（エンデミック）や非感染性の病気の経験とは、異なる特徴を持っている。パンデミックがパンデミックとされる一義的な所以は、それが世界各地で同時に流行を引き起こす点にある。とはいえ、新型コロナウイルス感染症の流行を経験した私たちは、単に「世界各地で流行している」ということ以上の意味をパンデミックに見出さざるを得ない。その筆頭は、病気に罹っている人も罹っていない人も、等しく病気の影響を受けるということだろう。パンデミックを引き起こすほどの感染力をウイルスが持っている場合、平時には健康とされる者であっても、他の病気や障がいとともに生きている場合と同じように、ときにそれ以上に、感染を予防するために多くのことを強いられることになる。他にも、世界中で感染が拡大しているという状況は、人びとの認識や行為に影響を与えることがある。さまざまな境界を超えた人の移動が制限されたり、抑制されたりする。あるいは、輸入感染を防がないことを前提とするのか、それとも完全に防ぐことができるのかといった認識の違いは、どのようにこの感染症に対応していくのかという、政策の舵取りにも大きな影響を与える。越境する人びとに対する、差別的とも言えるような負の意味づけがなされることもある。

このようなパンデミックがパンデミックであるが故にもつ特徴について、人類学は検討することができる。もちろん、人類学だけが、それについて検討できるなどという大言壮語を吐くつもりはない。それでも、人類学は世界各地で暮らす人びとの生の多様性を検討してきた蓄積を活かすことができる。パンデミックとはどのような現象であり、世界各地で同時並行的に起きている感染症の流行は、それぞれの地域でどのように経験されているのか。そこには、どのような共通性と多様性が存在しているのか。アジア地域を中心としながらも、北米やアフリカの事例を並べて提示する本書は、そのような探究の一端を拓くものである。

人類学がパンデミックについての研究に貢献できる第二のポイントは、withという言葉の含意を深めることと関係している。日本における感染拡大が顕著になった春先以降、感染症の流行を抑制するための生活のあり方を模索するなかで使用されるようになった「ウィズコロナ」は、二〇二〇年を代表する言葉のひとつであろう。

ただし、年末を迎えるにあたって、このウィズコロナという言葉の評判は必ずしも芳しいものではなくなってきた。新型コロナウイルスとともにある生活を志向するのではなく、そのウイルスを完全に日本から排除することを志向するべきだった。今からでも遅くないので排除のためにできることをすべてやるべきだ、という主張は根強い。そのように考える人びとにとって、withとこう前置詞は、日本のこれまでの対応の瑕疵を象徴するものとして捉えられている。

台湾やニュージーランドといった、新型コロナウイルスの排除に継続的に成功しているように見える地域が存在していることを鑑みれば、この論調に一定の説得力があることは間違いない。他方で、そのような論調は回顧的に眺めた際に出てくる発想であり、感染拡大の初期においては必ずしも妥当なものと考えられていたわけではない、ということには注意しておいてもよいだろう。

特定の病原体がある地域から排除できるかどうかは、その病原体の持つ細かな特性や、その病原体を排除するためにどのような対応を行うことができるのかといった、非常に繊細な状況に応じて変わってくる。例えば、ウイルスの平均的な潜伏期間が一日なのか四日なのか一〇日なのかによって、人間の側がとれる対応の効果には大きな違いが出てくる（直接的には、例えば、隔離期間や接触者追跡の対象となる期間が

異なってくる）。あるいは、新型コロナウイルス感染症の流行が、人口密度（より正確には人間同士の接触の量と質）と関連していることからすれば、東京を始めとする日本の都市圏において、ワクチンや特效薬、迅速診断キットなどの技術革新を待たずに、外出制限などの強い非医薬的介入（Non-Pharmaceutical Intervention）と大量検査で本当に新型コロナウイルスを排除することができたのかについては、はつきりとした答えが出ていくわけではない。思い返してみると、春先にウィズコロナという言葉が広まっていた際、意識されていたのはいかに流行を抑制するのかわかり、二〇二〇年の後半に批判されていたような、感染症対策と経済対策のバランスをとることが強調されていたわけではなかった。私たちが、この本を執筆していく際に、パンデミック「とともに」考える、という形で、あえてwithという言葉を採用したのは、前者の意味におけるウィズコロナという発想から、新型コロナウイルス感染症の流行とそのなかでの人びとの生活について、何ごとかを学べる可能性があると考えたからである。

感染症について人類学で考える際に、withという言葉は、二つの文脈への橋渡しを可能にする。

第一の文脈は、「〇〇患者」から「〇〇と生きる人びと」への呼称の変化である。一九七〇年代後半に、文学、歴史、哲学、社会学などの隣接分野と歩調を合わせながら生物医学についての批判的検討に乗り出した人類学において、古典的な批判として提起されたのは、医師は臓器や病気を見る一方で人間を見てはいない、というものだった。本書の編者のひとりである浜田が大学生の頃、日本の医療人類学の黎明期を切り拓いた武井秀夫から聞かされたエピソードが印象深い。かつて、武井が外科病棟で勤務していた頃、医師たちは、患者について言及するときに名前ではなく、病気の状況で人間を代表させて話していたというのだ。つまり、「山田さん」や「佐藤さん」に言及するのではなく、「あのすい臓ガンの患者」や「肝臓病の患者」について話っていたというのである。

初期の医療人類学が疾病 (disease) ではなく、病 (illness) に注目する必要性を提起した背景にも、

病気ではなく人間を見る必要性を強調したいという動機が垣間見える（クラインマン一九九六）。必ずしも人類学的な発想が広まった結果と言えるかどうかは判然としないが、それでも、四〇年弱の時間が経過するなかで、病気ではなく人間を見ることの重要性は医療者のあいだにも受け入れられるようになってきている。その徴候のひとつが、*Witz* という言葉の使われ方である。

例えば、アネマリー・モルは、この点について、「糖尿病者」から「糖尿病とともにある人びと」への変化を例に説明している。「糖尿病者」という表現が診断名と患者を同一視するものであるのに対し、「糖尿病とともにある人びと」は、「ピアノを弾くかもしれないし、アムステルダム出身かもしれないし、イタリヤ人の祖母がいるかもしれないし、歩くことを好んだり、食べるのが好きかもしれない」（モル二〇二〇…一四三）。人間の生活や特性は、診断名で完全に覆いつくされたり、代表されつくすわけではない。ここからも分かるように、*Witz* は、「当事者性を持ちながらもそれによってすべてが覆いつくされているわけではない病気」に思わされている人間の生のあり方」を示すために用いられてきた言葉である。

ただし、ウィズコロナという言葉には、「糖尿病とともにある人びと」と大きく異なっている部分もある。後者が、特定の病気に苦しんでいる人だけを指すのに対し、ウィズコロナという生活のあり方を要求されているのはすでに新型コロナウイルス感染症に罹っている人だけでなく、そうなる可能性のあるすべての人間である。この点、ウィズコロナという言葉は、(1)生活のすべてが病気によって全面的に塗りつくされているわけではない、(2)パンデミックの顕著な特徴としてのすべての人間が当事者性を持つ、という二つの特徴を同時に示しているのである。本書に収録されている論稿のいくつかは、この点を見事に描き出している。

人類学性

Witz という言葉が橋渡しする第一の文脈が病気と生活の関係に関わるものだとなれば、第二の文脈は人類学的な実践のあり方に関わるものである。医療と人類学の間だけを見ても、二つの領域の関係を示すために、様々な前置詞が用いられてきた。医療「についての」人類学 (*anthropology of medicine*)、医療「のための」人類学 (*anthropology for medicine*)、医療「のなかの」人類学 (*anthropology in medicine*)。 *Witz* という前置詞は、それらとは少し異なる関係性を喚起する。つまり、本書は、「パンデミックについての人類学」とも、「パンデミックの影響を軽減するための人類学」とも異なる、「パンデミックとともに考える人類学」を志向している。この点は、人類学がパンデミックについて考える第三の意義、つまりパンデミックについて考えることによってアップデートされる人類学の知が、パンデミック以外のものごとについて検討する際の助けになる、ということとも直接的に関係している。

「〇〇についての人類学」と「〇〇とともにある人類学」の差異について、積極的に検討を続けてきた人類学者にティム・インゴルドがいる。インゴルドは、芸術についての人類学と芸術とともにある人類学の差異を例にとりながら、明快な説明を提供している。インゴルドによると、芸術についての人類学は、特定の文化や社会における作品のコレクションとして芸術を扱うことで芸術について学ぶ一方で、芸術実践から何事かを学ぶことには失敗してきたという。それに対し、芸術とともにある人類学は、人類学的な実践のあり方そのものを芸術実践から学ぶとするのだという（インゴルド二〇一七…二九）。

インゴルドの議論を拡張して、少し戯画化して捉えるならば、「パンデミックについての人類学」とは、世界各地で経験されたパンデミックの流行の仕方やそれへの人びとの対応を集めてカタログを作るような

作業である。それに対して、「パンデミック」ともある人類学」とは、ウイルスそのものの挙動やウイルスへの人びとの対応から、人間や社会や世界についての何らかの新しい理解を導き出そうとするものである。

ただし、私たちはインゴルドがそうしたように、「〇〇についての人類学」と「〇〇ともある人類学」を必ずしも対立的なものとして捉えるのではなく、相互依存的なものとして捉えたいと考えている。民族誌的な記述が新しい思考の糧となり、新しい思考がこれまでとは異なる角度からの記述を可能にする。そのような正の循環を目指していきたい。本書は、そのような営みとして人類学を想像し創造するための一端となることを目指している。

思い起こしてみれば、パンデミックの発生というのは、様々な意味で人類学的な実践に変更を迫るものであった。国境を超えることのハードルがあり、また、人びととの接触を抑えるように要請されることは、異郷に住み込みながら行われる長期のフィールドワークや長時間にわたるインタビュ調査の実施を困難にした。そのようななか、人類学者は、自身の経験を起点にしたり、SNSを用いて情報収集をしたり、遠隔でのインタビュを実施したりといった創意工夫を行ってきた。本書は、そのような苦闘を記録するものでもある。

この苦闘を経たことによって、いま、どのような新しい人類学が生成しようとしているのかは、現時点では必ずしも明確ではない。また、同じような困難を抱えたジャーナリズムやドキュメンタリー制作者たちが、人類学者以上に現場の状況を伝え、また、独自の視点を切り拓いてきたことも、少なくとも日本においては間違いないように思われる。そのようななかで、人類学者が人類学者であるがゆえにつむげるのはどのような文章でありうるのか。本書は、パンデミック性とともに人類学性について、改めて研究を始めるための第一歩を記すものでもある。

本書の構成

パンデミックとともにある人類学の可能性を切り拓くために、本書は、「時間、環境、複数種」、「科学技術と自由」、「感染拡大と生活の再編」、「SNSを通じた共有と拡散」、「医療者の視点」の五つのパートに分かれた一六の論稿で構成されている。以下、それぞれのパートと論稿について、簡単に紹介しておこう。

時間、環境、複数種

パンデミックは、私たちの日常のあり方に再検討を迫っている。その対象は、外出制限や新しい生活様式によって焦点化される行動のレベルに留まるものではなく、特定の時間や環境をいかに生きるのかといった、より深いレベルの認識やそれと関わる実践にも及んでいる。私たちはどのような時間を生き、どのように未来を捉えているのか。私たちが生きている世界はどのようなもので、そのなかで人びとはどのように非人間を含めたアクターと関係を取り結んでいるのか。

吉田真理子は、新型コロナウイルス感染症とともに生きる世界を記述するにあたって、人間以上（モア・ザン・ヒューマン）の／複数種（マルチスピーシーズ）の人類学の分析視角を提示する。人間と非人間の偶発的な縫れあいや商品流通過程の相互作用に着目しながら人獣共通感染症を捉え直す重要性を提起している。

内藤直樹は、直線的な時間と振動する時間という人類学における二つの時間についての捉え方を念頭に、時間や未来についての捉え方の多様性に着目する「未来の人類学」の観点から、世界各地でほぼ同時に出

現したパンデミックの時間における未来の捉え方の多様性について、イタリアと徳島における自らの経験とケニア牧畜社会の対応に着目しながら検討している。

西真如は、日本における新型コロナウイルス感染症への非医薬的介入と自閉症者の脳神経学的環境を解明するための実験を並置することにより、新型コロナウイルス感染症への対応がどのような時間と空間に対する想像力を前提としており、その前提にどのような問題があるのかを明快に描き出す。その上で、「複数種の雲」のなかで感染症の流行を抑えるための対応がどのようなものであるべきなのかについて、重要な示唆を行っている。

科学技術と自由

パンデミックの発生は、それに対応するための人間の様々な実践を誘発した。その代表的なものは、科学技術の革新によって危機を乗り越えようとする動きであり、また、そのような動きに対する疑義の提起である。このような不確定性をはらんだ科学技術の急速な普及と、それに対する人びとの動きをどのように理解できるだろうか。

倫理学者の大北全俊は、慢性疾患のリスクを減らすためのヘルスプロモーションと新型コロナウイルス感染症への対応を比較しながら、両者に共通する行動変容という発想が、個人に責任を求めるものになりがちであることを指摘する。その上で、そこで要求されているとは異なる繊細で多様な責任が存在することを指摘し、複数の責任を引き受ける存在としての人間のあり方を描出する。

桜木真理子は、アメリカにおける抗体検査の開発・普及・利用に焦点を当てて、市民たちが、どのように抗体検査に対して多様な期待を寄せていったのかを丁寧な描き出ししている。桜木は、ブリュノ・

ラトゥールやマリア・ブイグ・デ・ラ・ベラカーサによる「議論を呼ぶ事実」についての検討を参照しながら、市民が科学技術を多様な関心に基づいて使用していく状況を解きほぐしていく必要性を提起している。

浜田明範は、ウイルスの描かれ方のひとつである感染者数に注目しながら、その数字がどのように人々に経験されているのか、どのように複数のやり方で実行（*enact*）されるのか、そして、その数字は何を表しているのかを検討している。その上で、浜田は、医療専門家と素人、科学技術と人間を対立的に捉える見方の限界を指摘し、新型コロナウイルス感染症の存在しなかった過去を憧憬するノスタルジアを乗り越える必要性と方向性を提示している。

感染拡大と生活の再編

人類学にとって、パンデミックという現象が検討に値する理由のひとつは、パンデミックが新しい生活のあり方の人びとに要求することにある。新型コロナウイルス感染症の流行は、それまでの生活の何を不可能にし、どのような新しい生活の可能性を喚起するのか。そして、新しい生活への要求は、異なる状況にある人びとにどのような濃淡をもって表れているのか。

北川真紀は、パンデミック下で地方移住が進んだ現象を念頭に、オフグリッドを志向する人びとの生活と危機との関係に焦点を当てて、オフグリッドとは、水道・電気・ガス・流通といったインフラから切り離された自足的な生活のことである。そのなかで北川が明らかにするのは、危機に対する「備え」というよりは生活の「修繕」や「再編」と呼べるような実践であり、態度である。

石野隆美は、二〇二〇年一月から八月にかけてのフィリピンの新型コロナウイルス感染症への対応を念

頭に、そこで持ち出された「ステイ・ホーム」というレトリックの二重性とそれに伴う生活の再編に光を当てている。多数の海外出稼ぎ労働者を抱えるフィリピンにとって、外出禁止を呼び掛けるスローガンである「ステイ・ホーム」は、同時に、医療従事者に自国において自国のために貢献するように促すものともなっていたという。

田中志歩は、パングラデシユの低所得者の身寄りのない女性たちに焦点を当てながら、パンデミックのなかで明らかになる政治経済的な構造に粹づけられた被傷性を描き出す。女性たちが経験しているのは、自身や配偶者が職を失うことに続けて起きる、パートナーシップを夫から一方的に解消されるという事態であり、そのことによって、夫との関係が安定的でなかったことが突如として明らかになるという事態である。田中の記述からは、パンデミックのもたらす生活への影響があらがいがたい形で押し寄せる場面があることが伺える。

緒方しらべは、ナイジェリアの都市に住まう、互いに見知らぬ四〇代の男女二人に注目することにより、当該地域におけるパンデミックの経験に光を当てる。そこから見えてくるのは、エリート的女性が別の目的のために運営していたNGOのネットワークを活用しながら、パンデミックに伴って生じた貧困や家庭内暴力に苦しむ人びとを支援する一方で、日雇い労働で食いつないでいた男性がそうした支援に対してシニカルにならざるを得ない現状である。

SNSを通じた共有と拡散

現場での参与観察に多くを依ってきた人類学にとって、現地に赴くことや対面で話をすることを困難にするパンデミックは、方法論上の問題を提起するものでもあった。ひとつの回答としてありうるのは、

人びとが生活の一部として取り込んでいるSNS上のやり取りを共有することで、彼ら、彼女らのリアリティに接近しようというアプローチである。

近藤祉秋は、SNSでの情報収集とオンライン記事の渉猟を組み合わせて、二〇二〇年三月から九月にかけての米国アラスカ州の状況を描写する。アラスカ先住民社会では、ヨーロッパ系アメリカ人との接触以降、感染症によって苦しんだ歴史を持ち、新型コロナウイルス感染症に関する懸念も強かった。内陸アラスカ先住民社会では、州内での感染が始まった当初、人びとが集住する村を離れ、キャンプへ長期逗留したほうが良いかもしれないという意見がSNS上で表明された。新型コロナウイルス感染症は先住民社会の集合的記憶を再賦活化したと言えるが、SNSはその有り様を垣間見せる一つの間であった。

岡野英之は、二〇二〇年二月以降のタイの状況を精緻に追跡しながら、SNSを通じた「怯え」の共有が、結果的にタイにおける感染拡大を抑えるのに一定の役割を果たしていたのではないかと述べる。近藤と同様、すでに人びとの生活の一部になっているSNS上で拡散された書き込みを題材にしながら、当の人びとについて語る岡野の手つきは、人類学的実践そのものの変容可能性を予感させるものでもある。

澤野美智子は、二〇二〇年一月から一〇月にかけての韓国のコロナ19への対応と、同時期にネット上で拡散されたネチズン達の書き込みを丹念に跡付けた、重厚で骨太な論稿である。具体的なデータを重視する澤野らしい地道な議論を展開することによって浮かび上がってくるのは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が、多様な形で生権力に対する抵抗と、包摂と排除のあり方を誘発している姿である。

医療者の視点

パンデミックがパンデミックである以上、その影響はあらゆる人びとに及ぶ。しかしながら、その影響

をもっとも大きく受けた人びとのなかに医療従事者があることは言を俟たない。医師たちは、感染症の流行をどのように眺め、そのなかでどのような経験をしてきたのだろうか。

医師であると同時に人類学者でもあるという経歴を持つ吉田尚史は、自身のミャンマーでの経験と在留邦人へのインタビューに基づいて、パンデミックのなかで海外での生活を強いられる在留邦人が、どのような不安や潜在的な問題を抱えながら生活しているのかを描き出す。

総合診療医の奥知久と人類学者の島菌洋介は、奥が参画してきたクルーズ船と介護・福祉施設への支援についてのオートエスノグラフィを基点としながら、そのなかで、奥がどのような経験をし、また、施設の職員たちがどのようにパンデミックに対応してきたのかを詳述している。そこから明らかにするのは、確かなことが分からない中で、施設の職員が感染予防と善きケアを両立させるために苦闘する姿であり、プリコラージュと呼べるような創意工夫を重ねていく姿である。

飯田淳子たちは、五名の人類学者、四名のプライマリ・ケア医、一名の理学療法士の十名からなるチームを組織し、日本のプライマリ・ケア医たちがこのパンデミックにどのように対応してきたのかを記述する取り組みを続けてきた。飯田たちは、この取り組みを通じて、プライマリ・ケア医たちが臨機応変に診療に当たただけでなく、医学的な情報の収集・取捨選択・翻訳、施設内の物理的環境の改変、様々なアクターとの連携・調整などにより、新型コロナウイルス感染症への対応を地域や施設の文脈に落とし込んできたこと、そしてそのプロセスを通じ、新型コロナウイルス感染症という事態がローカルな文脈において多様に生成されてきたことを明らかにしている。

本書は、これらの一六の論稿を集めることよって、パンデミックとともにある人類学の可能性の一端を拓こうとした。とはいえ、パンデミックにまつわる問題のすべてに言及できたわけではないこともまた事実である。とりわけ、パンデミックが改めて浮き彫りにした国家のあり方について、検討しきれなかったことは否めない。あるいは、従来の感染症対策との断絶と連続性についても、より深い考察があるべきだっただろう。その他にも、現時点では十分に把握できていないが探究に値する様々な問題が存在するだろう。本書が、それらの諸問題についての更なる議論の礎となれば幸いである。

【註】

(1) 必ずしも網羅的に視聴できているわけではないが、この点に関して、NHKBS1で毎週放送された「ワールドニュース特集 新型コロナに揺れた一週間」と、二〇二〇年一〇月一日に初回放送された「東京リトルネロ」は、その最良の部分で代表するものとして挙げておきたい。

【参考文献】

インゴルド、ティム二〇一七『メイキング——人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳、左右社。
クラインマン、アーサー一九九六『病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学』江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房。

モル、アナマリ二〇二〇『ケアのロジック——選択は患者のためになるか』田口陽子・浜田明範訳、水声社。